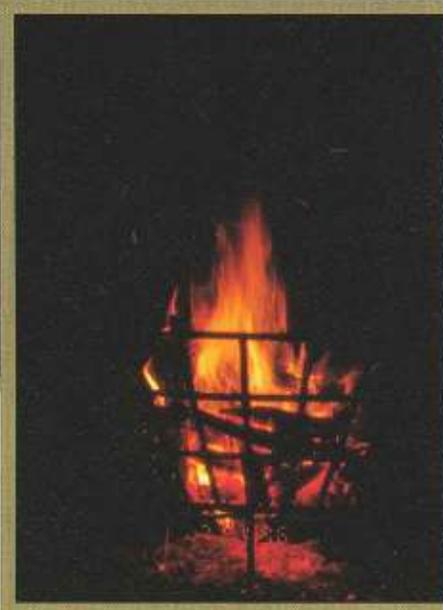
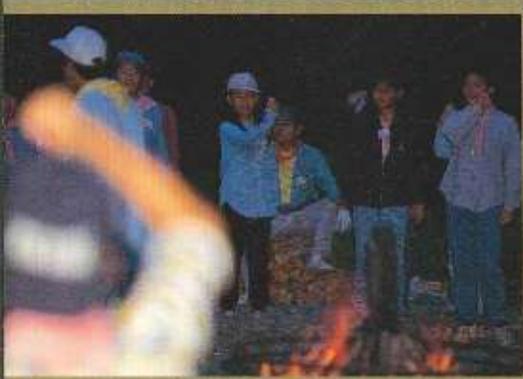
月刊
立川と語ろう　立川に生きよう
えくてびあん
9
〈EKUTEBIAN VOL.15 SEPTEMBER 1998 EKUTEBIAN〉
まい　あーと■せっこう画「動—9600—」by 橋本　直一

東京の滝 ⑧

檜原村・天狗滝

北秋川の「千足バス停」付近から林道に入り、千足沢にそって山道を五百メートルほど遡ると、山間に開けた断層面をゆるやかに流れる天狗の滝に出会う。岩肌に突き刺さったロッククライミング用のリングが貴婦人のピアスの如く映る光景は滝の優雅さをきわだたせるかのよう。浅い滝壺にはヤマメが泳ぎまわっている。ハイカー達はひとときの安らぎを楽しみ、さらに上流の「綾滝」へと向かう。

天狗滝付近はロッククライミングでも有名な場所。滝壺は浅く釣師が放流したと思われるヤマメが食事の最中であった。

撮影：中村　伸

キャンプファイアーはキャンプ最大のセレモニー。火の神様の登場で、大きな喝采の中に幕は上がった。

えくてびあんレポート

小さな夏の達人たち

平成8年度立川市少年団体ジュニア・リーダー研修会が
7月20～23日迄、長野県の「国立信州高遠少年自然の家」で行われた。
134人の子ども達が自分達の手で班旗をつくり、テントを設営し、
火をおこして食事をつくる。事前研修でイロハは習ったものの、
そうはうまくいかないのが本番。自然を相手にみんなでやりとげる
努力は、満面の笑顔というごほうびとなり、
眼は輝きを増していく。
中日、キャンプファイヤーを囲む子ども達
の気持ちはひとつになる。
研修がすべて終了すれば、子ども達は地
域の子ども会で活躍する柱であるジュニ
ア・リーダーとなる。そう「キャンプの達人」
になっているのである。

雨でハイキングは中止となりクラフトに変更。木片を使ったプレート作りに力作が並び、各班の優秀作が表彰された。

テントの設営から薪割り、火熾し、調理と全て自分たちの手で行う。
どこかぎこちないけど、出来上がった料理が美味しければ何も言うことなし。

主催：立川市教育委員会

人がゐて、街があります。
あなたがゐて、立川があります。
そこにちょっとだけ、えくてびあん！
リストのお店にはいつでも えくてびあん！

青木彰信（栄町）が泳ぐ
――もう一つのアトランタで――

オリンピックの熱気さめやらぬアトランタで、8月17日から開催されるパラリンピック水泳3種目に出場する、青木彰信さんの壮行会が立川市泉体育館の一室で開かれた。持ち前の負けん気とプレッシャーに強い精神力で昨年おこなわれたプレ・パラリンピックでは水泳200メートル自由型で世界新記録を樹立。今回もメダルへの期待がたかまっている。

障害のある子供たちにも水の楽しさを知ってもらいたいという思いから、立川市水泳協会が昭和58年にまだその当時、三多摩ではあまりおこなわれていなかったハンディー水泳教室をスタートさせた。

脳性麻痺による障害を両手足と言語に持つ青木彰信さんが、この水泳教室に一期生として通いはじめたのは小学校の二年生の時だった。プールの水に慣れるまでに約3年間かかり、その間両親は何度やめさせようかと思ったという。

「パラリンピックに出場するなんて考えてもみなかった」と当時を振り返って笠原コーチは語る。

はじめて青木さんがクロールで25メートルを泳ぎきったとき、周囲はまるで自分のことのように手をたたいて喜んだ。しかしその姿は「溺れているようだった」という。この頃から少しずつ泳ぐ楽しさを覚えて泳力が急激に伸びはじめる。

多摩障害者スポーツセンター主催の水泳記録会に小学五年生で初参加、体の機能を回復させるためのリハビリから競技スポーツとして本格的な練習に取り組むようになっていく。

通常のトレーニングでは一時間で約千五百から二千メートルを泳ぐ。青木さんの場合、練習での体力の消耗は普通の人よりも激しいため、自己管理もできなければタイムを縮めていくことはできないという。

「自己ベストが出なければ褒めたりはしません。安易に褒めることは彼にとってマイナスと考えるからです」と笠原コーチ。その言葉はタイムを縮めるためだけを言っているのではないようだ。

「これからハンデをどう乗り越えていくか、水泳でこれだけ頑張れたんだからというところに、結びつけていってほしいと思っています」とも語り、その中には今何かをつかんでいってもらいたいという青木さんへのメッセージが含まれている。

日本選手権や世界選手権など数々の大会に出場し、17歳の時に参加したジャパン・パラリンピックでは五十メートル自由型で日本新記録を出して〝立川の青木〟が少しずつ知られるようになった。平成6年にマルタ国で開かれた世界選手権では、五十・百メートル自由型で銅メダル。昨年アトランタで開催されたプレ・パラリンピックでは、五十・百・二百メートルの自由型で優勝し二百メートル自由型では、3分47秒74の世界新記録をマークした。

日本から水泳でアトランタ・パラリンピックに参加できるのは7名。そのうちの一枚の切符を手にした青木さんはメダルの有力候補の一人。会場になるジョージア工科大学のプールは五十メートルプール。二百メートルを二十五メートルプールで泳ぐ場合、ターンは8回必要になる。一方、五十メートルプールであればターンは3回ですむ。ターンによるロスタイムが少なくなるぶんメダルへ一歩近づく。メダルの可能性についてたずねると、「これはっかりはわからないですね。何が起きるか予測できないですから。私たちも褌をしめ直さなければならないと思っています」と笠原コーチは語り、青木さんは「一位を取りたいと思っています」と力強く言う。経験を積み体力も上ってくるこれからは今以上のタイムが期待できる。生活をどうしていくか、自己管理を含めトータルで見ていかなければいけないと感じているという。

最終調整のための合宿を終え、8月の12日にアトランタへ向け成田を出発する。8月17日から8月25日までの9日間、オリンピックと同じジョージア工科大学のプールで熱戦がくりひろげられる。

先の大会で3分39秒代を出している二百メートル自由型は8月20日におこなわれ、メダルの期待がかかる。

街のせせらぎ

玉川上水と分水の会　小坂 克信

今年は渇水で、神奈川県では一部給水の制限をした所もある。近くでは立川市を水源とする矢川の水が、約五カ月間も枯れて流れなかったという。この矢川は、斎場の下あたりが都の緑地保全地帯に指定され、オギなどが生えている。下流は、国立市の民家などの脇を流れ、ミクリが川の中に揺らめいている。このように、街の中を水が流れているのを見るのは、実にいいものだ。

街の中のせせらぎは、もちろん立川市内にも残っている。富士見町五丁目や柴崎町一丁目の住宅地の中を流れる柴崎分水が、そうである。今は、家族からの雑排水が入っている所があり、水は以前に比べると汚れてはきている。しかし、普済寺の付近など、分水の流れに沿って歩くという散歩コースには適している。この下流では、柴崎体育館付近の田んぼに使われ、菖蒲園にも利用されている。

この柴崎分水は、元文二年（一七三七）に作られた。分水口は、玉川上水の松中橋のすぐ上流にあり、砂川分水口と並んでいる。砂川分水は、明暦三年（一六五七）で八〇年も古い。さて、この柴崎分水は、かってはJR青梅線の南の東京街道沿いから諏訪神社の西を流れる本流があった。この分水の流れを見ると曲りくねっていて、それ以前にあった家々に配水できるようになっていたことがわかる。これに比べて、砂川用水は今はほとんどが暗渠になってしまったが、五日市街道に沿ってほぼ一直線に流れていた。砂川は、江戸時代に開発してできた村である。たぶん、砂川分水も新田村の宅地割当てと合わせて、都市計画的に作られたものだろう。

このように、分水の水路一つを取り上げても、街の成立と深く係わってきたことがわかる。また、水の乏しい武蔵野台地の村に生きる人々の生命線でもあった。つまり、井戸はあったが数が少なかったので、分水の水は飲料水として利用した。もちろん、鍋や釜を初めとする洗い物や洗濯・風呂などの生活用水、田用水、そして水車を回す動力としても使用してきた。水車というと、やや不思議に思うかもしれないが、市内には延べ二十六台もあった。しかも、上流を堰あげ、下流を掘り下げて平地でも回転できる工夫がされているものもあった。そして、大麦や米を精白したり、小麦粉を作ったり、糸を撚ったりするのに使われた。このように、分水はかつて立川市域に住んだ人々の生活を、江戸時代から支えてきた。だが、一時は〝汚いものには蓋〟という考えなどで、暗渠にした。また、交通事情などの安全面から、そうした所もある。

しかし、今度は街の中にある数少ないせせらぎとして、市民の生活に潤いをもたせる環境用水として、ぜひ残してほしい。もちろん、水質や冬の水量、護岸などの面は考慮されなくてはいけないだろう。また、約二六〇年間もの歴史のある柴崎分水は、子どもたちにとって生きた教材になる。水道以前の歴史を伝える文化遺産でもあると同時に、魚取りなどのできる遊び場にもなる。さらに、やり方によっては、きれいな水を貯めておくことができる。昨年の阪神大震災では、水が出なくて消火できなかったと聞く。今の技術を活用するなら、柴崎分水の水を使って、地震などの災害時に一時的でも対応できる設備は可能だろう。ふだんは田用水、環境用水として街の中を流れるせせらぎ、いざという時は消火用水、またろ過装置をつけて生活用水にするように考えたらどうだろうか。

えくてびあんエッセイ●No.43

表紙は語る

まい あーと せっこう画「動―9600―」by 橋本直一

鮮やかな色彩が目をひく今回の作品は7月に立川ルミネの朝日ギャラリーで開かれた昭島美術協会展に出展された橋本直一さんの作品。立川の中学校に美術の先生として着任された橋本さんは立川第9中学校の校長先生をおえるまで26年間立川の中学で先生をして来たという。

麻布の上に石膏をながし、固まってから色を付けていく。「なんとか石膏を平面で使うことができないかと考えて」せっこう画が作られた。作品のタイトルである「動」とは〝生きる証〟のことだという。流したまま自然にかためたユニークな形の石膏に色を付けると、見たことのない不思議な生きものができあがる。「遊び心をふんだんに出そうと思って」作られた今回の作品は橋本さんの〝生きる証〟の中に〝遊び心〟がつまっていることを表しているような気がする。

真如苑だより

五行説で秋は金にあたるところから秋の風を「金風」ともいうようです。身体をかるくしてくれるような爽やかな風に吹かれると、秋風はまさに「金」の価値があるように思えてきます。

今月もどうぞ真如苑へおでかけください。お待ちしております。

■日時　9月19日(木)
　2時～4時

■御本尊、真如宝物館をはじめとして映画など盛りだくさんの用意がしてございます。

■お申し込みは「えくてびあん・コンパニオン」(本誌を手渡してくれた人)へ。

東風

暑い、暑いとわめいている間に秋到来となった。もっとも、暦の上では立秋が今年は8月7日であった。秋はとうの昔にきていたのである◆かなり前から「積秋説」というのをとなえているのだが、いかがであろうか。秋の気配は天から少しずつ降ってきて、それが地上に積もるとするもので、音こそしないが、夏の間から降り続けていて、人知れず積もりはじめている。その「秋」が人間の背丈ほども積もってくると、人びとは「秋も深まりましたねえ」などと挨拶を交わすようになる。これを積秋説と呼ぶことにしよう◆アトランタ・オリンピックも終った。恒例の甲子園も終った。どこか、ポカンと気の抜けたような感じをもっている方も多いのではないだろうか、例年のことながら、甲子園の季節は暦とはうらはらに、暑さが続く。だがその暑さのさなかにも「秋」はそっとしのび寄っているのである。甲子園での決勝戦が終る、サイレンが鳴る。閉会式となって、見上げれば大会旗だけが飄然と揺れている。あの風が秋風第一陣という見方はできないであろうか◆残暑きびしいなどと云っているうちに、「積秋説」に従って、秋はぐんぐんと深まってゆくであろう。そして、今月は早くもお彼岸を迎える。暑さ寒さも彼岸までとは、よく云ったものである◆えくてびあん　さらに高しと　思ふ天

（編集）池田隆男　牛田彰一　小杉和己　小林康史　隅川 理　名尾辰真　岩井正弘　町田健一　山田恵子　松本わかこ
（写真）天野武男　板橋一明　井上義治　スタジオ269　中村 伸　五来孝平

月刊えくてびあん　第146号
平成八年九月一日発行
発行所　えくてびあん編集工房
東京都立川市曙町2-17-5
杉田ビル6F　〒190
電話　〇四二五(28)〇〇八二
FAX　〇四二五(28)一二九七
編集発行人　立井啓介
印刷所　㈱大廣社

ウォッチング
庭木にサボテン

柴崎町の住宅街のとある家。玄関横にでんとかまえた立派なサボテンがある。南アメリカ原産の柱サボテンの一種とプレートにある。50センチのサボテンを昭和51年に植栽して見事に成長してきた。茎のくびれが1年の伸びを表わす。猛暑続きの夏は良いが、冬の寒さに負けないで育ってきた20年間を思うと、御主人のサボテンにかける愛情がよくうかがえる。いつの日か、「屋根より高いサボテン」が立川の名木「柱サボテン」と謳われる時がやってくるのであろうか。

WATCHING

立川昆虫記

2

【アキアカネ】

トンボ目トンボ科

絵・文　中西　章（若葉町）

　このトンボは避暑をするという変った習性を持つ。六月下旬、成虫になった色白のトンボは、集団を作り、水辺を去り、五〇キロ米もはなれた高い山に移動し、涼しい頂上附近で夏を過し、秋になるとからだが赤くなって、再び平地に降りて来て、池や沼、学校のプールなどに産卵する。中には畑に敷かれたビニールを水とまちがえて産卵しているのも居る。卵はそのまま冬を越し、翌年の三月幼虫になる。毎年九月下旬の晴れた日、立川にも突然アキアカネの大群が出現し、夏の終りを知る。